

禁制の賦

野村胡堂

一

笛の名人春日藤左衛門は、分別盛りの顔を曇らせて、高々と腕うでまねを拱こまぬきました。

「お師匠、このお願いは無理でしょうが、亡なくなった父一色清五郎から、お師匠に預けた禁制の賦ふ、あれを吹けば、人の命に拘かわるといふ言い伝えのあることも悉ことごとく存じておりますが、お師匠の許を離れる、この私への餞別せんべつに、たった一度、ここで聴かして下さいるわけには参りませんか」

一色友衛しきともえは折入って両手を畳に突いて、こう深々と言い進むのです。春日藤左衛門に取っては、朋輩ほうばいでもあり、競争者でもあった一色清五郎の忘れ形見、一時は酒と女に身を持ち崩しましたが、近頃はすっかり志こころざしを改めて、芸道熱心に精進し、今度はいよいよ師匠藤左衛門の許もとを離れて、覚束おぼつかないながらも一家おこを興おこそうとしている男でした。取って二十七、少し虚弱で弱気ですが、笛の方はなかなかの腕前で、もう一人の内弟子の、鳩谷はとや小八郎と、孰いずれとも言われないと噂もつとされました。

「一々もつと尤も、お前の言葉に少しの無理もない。が、『禁制の賦』は三代前の一色家の主人あるじ、一色宗六という方が、『寝取り』から編あんだ世にも怪奇な曲で、あれを作って間もなく狂死したと言われる。その後あの曲を奏そうする毎に、人智の及いばぬ異変へんがあり、お前の父親一色清五郎殿が、嚴重な封をしてこの私に預けたのだ。流儀の奥伝秘事おくでんひじ、ことごとくお前に伝えた上は、あの『禁制の秘曲』も

還^{かえ}しても宜いようなものだが、何んと言っても、まだ三十前の若さでは、万一の過^{あやまち}があつては取返しがつかぬ。決してあの曲を惜むわけではない、せめてあと三年待つがよからうと思うがどうだ」
春日藤左衛門は道理を尽して、こう言うのです。

「よく判りました、お師匠。でも、私のような若い者には、笛を吹いて崇^{たたり}があるということは受け取れません。それはほんの廻り合せか、吹く人の心構えの狂いから起った間違いでございましょう。それに私は自分の未熟もよく存じております、『禁制の秘曲』をこの私に渡してくれというような、そんな大それた事は申しません。たった一度で宜しゅうございます。後学のために、お師匠の許を去るこの私に、一色家に伝わる秘曲を、吹いて聴かして下さいればそれで堪能^{たんのう}するのでございます」

「――」

藤左衛門は口を緘^{つぐ}んで友衛の後の言葉を待ちました。

「禁制の曲に魔がさすと言うのは、夜分人に隠れて、そっと吹くからでございましょう。一日中で一番陽氣の旺^{さか}んな時、たとえば正午^{うま}の刻^{こく}と言つた時、四方を開け放ち、皆様を銘々のお部屋に入れ、火の元の用心までも嚴重に見張^きって、心静かに奏^{そう}したなら、鬼神^{いえど}と雖も乗^すずる隙^{すき}がないことでしょう」

一色友衛は、芸道の執心のために、どんな犠牲でも忍び兼ねない様子でした。

「いかにも尤も、――それほどまでに言うなら、この秘曲の封を解いて、お前にも聴かせ、この私も心の修業としよう」

春日藤左衛門はとうとう折れました。この話の始まったのはちようど辰刻半^{いつつはん}（九時）。それから準備を整え、正午^{ここのつ}刻少し前には、

妻玉江、娘百合、あやめ、下女お篠、下男作松、内弟子鳩谷小八郎を、それぞれの部屋へ入れ、主人春日藤左衛門は、一色友衛とたった二人、奥の稽古部屋に相對して、三十年前友衛の父一色清五郎の封じた、禁制の賦の包を解きました。

中から出たのは、平凡な能管のうかんの賦ふが一冊、それを膝の前に開いて春日藤左衛門は見詰めました。

「よいか」

「はッ」

一色友衛は五六尺下がって、畳の上に両手を突きます。

蛇あぶが一匹、座敷を横切って庭へ飛去ると、真夏の日はカツと照り出して、青葉の反映が、藤左衛門の帷子かたびらや、白い障子を、深海の色に染めるのでした。

高々と籐とうを巻いたぬば玉の能管のうかん、血のような歌口をしめしながら、藤左衛門はさっと禁制の賦に眼を走らせます。

一寸見たところでは、何んの変哲へんてつもない、『寝取り』の変奏曲ヴァリエーションですが、心静かに吹き進むと、その旋律せんりつに不思議な不気味さがあつて、ぞつと背そびらに水を流すような心持。藤左衛門は幾度か氣を変えて途中から止そうとしましたが、唇は笛の歌口こうちやくに膠着して、不気味な調べが劉亮りゅうりやうと高鳴るばかり。

これは併しかし、いろいろの先入心が、強迫観念になつて、技倆ぎりやうに自信を持ち過ぎる、春日藤左衛門の心を脅おびやかすのでしよう。

「――」

吹きおわった笛を、流儀の通り膝の前に置いて、藤左衛門はホッと溜息ためいきを吐きました。しばらくは師匠も弟子も、物を言うことさえ忘れていたのです。

「有難うございました」

やや暫く経って、緊張のゆるんだ一色友衛しきともえは、丁寧に一礼しました。

その時、――

「わッ、た、大変ッ」

下男しもやうの作松の凄まじい声が、遙かの方から真昼の部屋部屋を筒抜けて響きます。

二

「何どうした」

「何が大変だ」

家中の者が、八方から集まりました。作松が怒鳴どなっているのは、中庭そむに背いて、庭木戸ていぎこに面した、二番目娘あやめの部屋の前、踏石ふみいしの上に立ったまま、縁側へ手を突いて、部屋の中をのぞく恰好かつこうになったまま、なおも氣狂い染じみた声を張り上げているのです。

「お嬢さんが、――お嬢さんが」

「娘がどうした」

一番先に駆け込んだのは、春日藤左衛門かすが、それに一色友衛が続つき、鳩谷小八郎はとやが続きました。

「あッ」

凄まじい恐怖きょうふが、花火のように炸裂さくれつしたのも無理はありません。部屋の中に若い娘が一人、首に強靱きやうじんな麻縄あさなわを巻かれ、その縄尻うづむきを二間ばかり畳から縁側に引いて、俯向うつむきになったまま死んでいたのです。

「お、あやめッ」

が、引起した藤左衛門は、一と目、それは妹のあやめで無いことに気が付きました。

「あ、百合ゆりだ」

「お姉さん、まア」

妹のあやめは涙声になって、姉の死骸に縫すがりつきました。

無残な姿になっているのは、少し足が悪い上、ひどい疱瘡ほうそうで見
る影もないきりようになった姉嬢のお百合、二十四になるまで両
親の側にいて、芸事に精を出している、日蔭の花のような娘でし
た。

十九になる妹のあやめは、姉に比くらべるとびっくりするほどの綺
麗さ、その方は幸さいわいに無事だったのです。

「まア、どうしたことでしょう」

母の玉江は、一番遅れて縁側へ顔を出しました。十九の時あや
めを生んで、今年は三十七、継子ままこのお百合よりは、遙かに美しく、
若々しくさえ見える内儀ないぎぶりです。

それから際限さいげんもなく混乱がつづきました。医者が来る前に、呼
び掛ける者、泣き叫ぶもの、水をかける者、背中せなかを叩くもの、滅
茶滅茶な介抱をしましたが、お百合はもう息を吹き返しそうもあ
りません。

町内の御用聞、佐吉が駆け付けたのは、それからまた一刻ひとときも
経った後のことです。

一と通り様子を聴いて、お百合の死骸を見ると、

「すまねえが、お内儀に番所まで来て貰おうかえ」

錆さびのある声が、藤左衛門とその若い女房の玉江を縮ちぢみ上がらせ

ます。

「親分、——^ま継しい仲には違いないが、この女は、そんな大それたことの出来る女じゃありませんよ」

藤左衛門は一応女房を庇護しました。

「いや、配偶^{つれあい}の言うことなどは当^{あて}になるものじゃねえ」

佐吉は少し光沢^{つや}のよくなった頭を頑固^{がんこ}らしく振ります。

「御新造さんじゃありませんよ、親分さん」

下女のお篠^{しの}です。二十一歳の純情をぶちまけて、自分達にはこの上もなく良かった、主人の妻を救う気になったのでしよう。

「お前なんかの口を出す場所^{ところ}じゃねえ、引込んでいるがいい」

「だって御新造さんは、上野の午刻^{このつ}の鐘が鳴るズーッと前から、ツイ今しがたまで、私と一緒にお勝手にいたんだもの」

「何んだと？——そいつが嘘^{うそ}だった日にや、手前^{てまえ}も牢^{ろう}へ叩き込まれるよ」

「いいとも、舌を抜かれても驚かないよ」

お篠は一步も退^ひきません。その真っ正直らしさも、佐吉の疑いをケシ飛ばしましたが、それよりも縁側にしょんぼり坐ったまま、一言も弁解がましい事を言わない玉江の態度が、今まで悪者ばかり見て来た佐吉の眼にも、かなり不思議なものに映^{うつ}つたのでした。「よし。それじゃお前^{まえ}の顔を立ててやろう、——ところでその縄を見せてくれ」

佐吉は死骸から外した縄を受取って、念入りに調べました。

「その尖端^{さき}が罫^{わな}になって居るようだが——」

鳩谷小八郎はツイ口を出しました。この男は一色友衛より四つ年下の二十三で、武家出の腕も才覚も出来た男、わけでも妹娘の

あやめと、何かの噂を立てられている、立派な男でもあったので
す。

「成程、こいつは毘だ、——どんな具合に首に掛けてあったか、
ちよいとやって見てくれ」

「――」

佐吉の頼みに、皆んな顔見合せるばかり、一人も立とうとする
者はありません。

「親分さん、——縄の先が毘になって居ましたよ。投げ毘で獣を
捕る時にやる——あの調子で——」

作松は何の作意もなく、そんな事を言うのです。

「ちよつとそれをやって見てくれ」

「いやな事だが、やりますよ。大きいお嬢さんの敵を討つためな
ら、これも仕方があるめえ。南無阿弥、南無——」

作松は念仏を称えながら、百合の死骸の首に縄を巻いて見せる
のでした。

「成程、それなら遠くから投つて、首へ引つ掛けられる、——お前
は何処の生れだ」

佐吉は変なことを訊きました。

「信州ですよ、尤も十七の時江戸へ出て、二十五年も奉公してい
るが——」

「すると前厄か」

「へエ——」

「信州に居る時は、ちよくちよくその投げ毘で獣を捕ったんだろ
う」

「時々はやりましたよ、親分」

「今でも、人間くらいなら捕れるだろうな」

「と、飛んでもない」

作松は愕然がくぜんとしました。首尾よく佐吉の訊問じんもんの罟わなに掛ったのです。

「まあ宜い、——ところで庭木戸は内から締っているようだが——」

「ここは滅多めったに開けません」

一色友衛はしかと言ひ切りました。

「下手人げしゅにんは家の中の者で、たった一人で居た者となると——」

佐吉の眼はともすれば継母けいぼの玉江と、下男げしゅにんの作松の面上に探り寄ります。

三

「親分、お助けを」

その日の夕刻、下男げしゅにんの作松は、辛からくも春日家を脱け出すと下谷竹町から神田明神下まで一氣に飛んで、銭形平次の家へ転げ込んだのです。

「あッ、脅おどかすぜ、爺おとさん」

平次はそんな無駄を言いながら、この闖入者ちんにゅうしやを迎えました。

「銭形の親分さん、お助け下さい。一生のお願い、親分を見込んで、命がけで飛んで来ました」

「おだてちゃいけねえ、俺は人に拝まれるような悪いことをした覚えはねえ、——まあ、落着いて話して見るが宜い」

平次はお静あじを頤あごで呼ぶと、冷たい水を一杯持って来させ、それを作松に吞ませて、ともかくも落着かせました。

「親分、お願い——」

「また拝むのかい爺さん、わけも言わずに、いきなり拝まれちゃ、面喰らっているだけだ。わけを話して見ねえ」

平次と、ガラッ八の八五郎に慰められて、作松はようやく落着いた心持になりました。

その訥々とした口調で、何うにか呑み込ませたのは、今日の昼頃から起った、笛の春日藤左衛門一家に起った出来事の顛末です。——こんなわけでございます、親分さん。禁制の賦とやら、不気味な笛の音のする最中、私は裏の物置の中を片付けていました。笛も済んだようだから、庭でも掃くつもりで、お嬢さんの部屋の前まで来ると——」

「——」

作松はゴクリと固唾を吞みます。無言でその先を促す平次。

「お嬢様は首に縄をつけて、部屋の真ん中に俯向に倒れて居なさるじゃありませんか」

「部屋の真ん中に、俯向だね——仰向じゃあるまいな」

「間違いはございません。着物や、髪形がよく似ているので、最初は見馴れた私も、妹のあやめさんと間違えたほどですから、玉子を剥いたようなあやめさんと、疱瘡で菊石になったお百合さんとは同じ姉妹でも大変な違いようで、仰向になっていれば、間違えるようなことはありません」

「成程」

「疑いはお内儀の玉江様に掛りました。お百合さんとはたった十歳しか違わない継母ですから、佐吉親分が一応そう思うのも無理のないことです。が、お内儀は心掛の立派な方で、そんな浅まし

い事をなさるような人柄ではございません」

「――」

「それに継しい仲の――殺されたお百合さんは、ひどい菊石あばたの上に、足も悪く、尼あまさんのような淋しい心掛で暮して居る方でしたが、そのお心持の立派なことに申ししては――」

作松はツイ涙なみだ繁くなる様子です。四十男の作松は、長い長い奉公の間に、生い立ちからの二人の姉妹を見て、きりようは醜みにくくとも、心掛の美しいお百合に、淡あわいあこがれを持つようになっていたのでしょう。

「で？」

平次は又その先を促うながしました。

「佐吉親分は、投げ罍わなを死骸の首に掛けさせて見るような、随分イヤな事をさせた上、いきなり私を縛ると言い出すじゃありませんか。信州の山奥にいる時は、ずいぶん投げ罍も使いましたが、それはもう二十何年も昔のこと、江戸へ出て人間あやを害めることなどは、夢にも考えちゃいません」

「成程、そいつは放ほって置いちゃ気の毒だ」

平次はツイツイそんな事を言うのでした。

「有難い、それじゃ銭形の親分さん、乗出して下さいますか」

「待った、そんなに夢中になっちゃいけねえ。御用聞にも縄張りがある、下谷竹町は佐吉の縄張りだ、俺はあんなところまで乗出すわけには行かねえ」

「そう言わずに、親分」

作松は拝んでばかりは居ませんでした。いきなり平次の手を引立てて、力づくでも引張って行こうとするのです。

「冗談じゃねえ。そんなつまらねえ事をしたところで、親分はどうにもなるわけはねえ」

ガラッ八の八五郎ツイ立上がりしました。

「親分さん、お願いだ。俺はどうなっても構わねえ。が、殺されたお嬢さんのお百合さんは、本当によく出来た方だ。あの敵を討たなくちゃ、この腹の虫が癒えねえ」

作松は、平次の手に取りすがったまま、ポロポロと泣くのです。

「よし、それ程に言うなら行って見よう。が、下手人は並大抵の人間じゃあるめえ、どんな人間を縛ったところで、後で怨んじやならねえ、判ったか」

「それはもう親分さん」

「それからもう一つ、お前に訊いておくが、娘の部屋の前の裏木戸は、本当に閉って居たんだね」

「間違いはありません。先刻私が縛られそうになって、飛出そうとすると、木戸は内から閉って居るじゃありませんか」

「そいつは大事なことだ、——八、行つて見ようか」
「親分」

平次の持前の探究心は、佐吉への気兼ねも忘れて、とうとうこの事件の真ん中に飛込ませたのでした。

四

竹町へ着いたのはもう夕刻。肝心の作松が大きな疑いを背負ったまま行方不知になつて、佐吉がカンカンに怒っている最中へ、銭形平次と八五郎をつれて、ノッソリと歸つて来たのです。

「何処へ行って来やがった、野郎ッ」

飛付く佐吉。

「兄哥あにき待ってくれ、——様子はこの男から聴いたが、どうも下手人は外にあるようだ」

と平次は見兼ねて割って入りました。

「お、銭形の、兄哥の知恵を借りるほどの事でもないようだ。人間の首っ玉へ、投げ罨なんか引っ掛ける野郎は、どう考えたってその男の外にはねエ」

佐吉は憤々ふんぶんとして作松の物悲しい顔を指すのです。

「そう思うのも無理はねえが、自分で殺したのなら、わざわざ罨わなを人様に見せて、疑いうたがを背負い込むような馬鹿はあるめえ」

「その野郎は賢い人間だというのかえ、銭形の」

「賢くはねえだろうが、満更馬鹿でもねえ様子だ。それに兄哥」平次は一向こだわりのない調子で、そこに固唾かたずを呑む円陣の顔を一とわたり見やりながら、部屋の中に眼を移しました。

「——」

佐吉の憤懣ふんまんは容易に和められそうもありませんが、此処でムキになっては、後の不面目を救う由もないことを知って居るのか、次第に職業的な冷静さを取戻す様子です。

「ね、兄哥。死骸は仰向あおもむけじゃなくて、俯向うつむけになって居たそうじゃないか」

「ウム」

佐吉は不承不承にうなずきました。

「投げ罨を首に掛けて、遠くから引いて殺したのなら、後ろ向になって居るところをやられた筈だから、死骸は仰向になって居

なきやならない」

「――」

「死骸は俯向きになって居るし、作松は草鞋わらじを穿はいている」

「――」

「ノコノコ部屋に入つて、後ろから絞めておいて、俯向に転がしたのはどう考えても作松じゃねえ」

「――」

「身に覚えがあるなら、そこで怒鳴どなつて居るわけもなく、俺のところへ飛んで来る道理もねえ。まア作松は放つておいて外を捜さがして見ようじゃないか、兄哥」

平次の調子は慇懃いんぎんですが、条理は櫛くしの齒のように真つ直ぐに通つて、佐吉も今は争う余地ありません。

「すると下手人げしゅにんは？」

「困つたことに、俺にも判らねえよ」

「ハッハッハッ」

平次の言葉の唐突とうとつな調子に、佐吉は思わず笑つてしまいました。佐吉の大笑いで二人の間の蟠わだかまりが取れると、平次は改めて春日かすが家の一人一人に当つて見ました。主人の春日藤左衛門は、

「何んにも心当りはありません。不具ふぐではあったが、あの娘は心掛の良い娘で、人様に怨まれる筈もなく、こんなことになっては、可哀想でなりません」

そんな事を言うだけの事です。

「縁談の事とか、婿むこの話は」
と平次。

「そんな事は耳を塞ふさいで、聴こうとしなかった娘です。可哀想

に、諦^{あきら}めていたのでしょうか」

「それから、話は違^{ちが}うが、その禁制の曲とやはらは、本当に崇^たるものでしょうか」

「さア、――まさかね」

平次の真面目な態度に引入れられて、春日藤左衛門は本当の事を考えて居たのです。家柄だけに、笛の奇蹟^{きせき}を信じたいことは山々でしょうが、娘一人を殺した相手が、鬼神や魔神の仕業^{しわざ}では、親心が承知しなかったのです。

「二人の内弟子のうち、どっちが笛がうまいでしょう」

平次の問いはいよいよ定石^{じようせき}外れです。

「一色友衛の方が少しうまいでしょうが――」

若い時分に道楽強^{かつ}かったことや、師匠^{せがれ}の倅^{せがれ}という遠慮や、性格的ないろいろの欠点^{けってん}が、春日藤左衛門の心を、武家出の鳩谷小八郎の方^{かたむ}へ傾^{かたむ}けている様子です。

平次はそれ位にして、内儀の玉江を別室に呼んで見ましたが、この美しい継母からは何んにも引出せません。お百合^{ゆり}の死んだ驚きと悲しみに顛倒^{てんとう}して、何を訊ねても、世間並の返事しか聴かれなかったのです。

続いてあやめ、これは大変な収穫でした。

「悪者は、どうかしたら、この私を殺す心算^{つもり}ではなかったでしょうか」

姉に似ぬ美しい顔を硬張^{こわば}らせて、そのつぶらな眼をしばたたくのです。

「どうしてそんな事が」

と平次。

「だって、笛の音のする間、皆んな自分の部屋に居るようと言われたのに、私は、怖いからお母さんのお部屋へ行っただんです」

「すると、お母さんはお勝手へ行つて、お部屋にはいらつしやらなかつたから、お帰りを待つて居たんです」

「――？」

「その間に、姉さんは、私に用事があるかなんかで、私の部屋へ行き、うっかり手間取つて居るところを、後ろ姿が似ているので、私と間違えて殺されたのではないでしょうか。年はずいぶん違っているけれど、あんまり着物の柄が違つては、嫁入前の姉さんに氣の毒だからと仰しゃつて、お母さんのお指図で、私とお姉さんと似たようなものを着ているんです」

あやめの話は、処女らしくたどたどしいものでした。でも平次は巧みにその話を整理していくと、曲者の意図が何処にあつたかが判るような氣がしました。

このすぐれて美しい娘が、事件の原動力になつて、氣狂い染みた殺戮へ、誰かを引込んで行つたのでしょうか。この娘の命を狙う者は誰？ 平次の眼は、若い二人の男、鳩谷小八郎と一色友衛に釘付けになりました。

もう一度、その微妙な消息を春日藤左衛門に訊くと、

「一色友衛にも鳩谷小八郎にも、娘をやると約束した覚えはありません」

とはつきり言い切ります。

一色友衛は藤左衛門の昔の朋輩の子ですが、放埒で、弱氣で、笛の腕前は確かでも、娘をやる氣にならず、鳩谷小八郎は、武家

の出で腕もよく、男振りもなかなか立派ですが、人柄に気に入らないところがあって、娘の養子にはしたくないと言った心持が、藤左衛門の言葉の外に溢れるのでした。

もう一度あやめに訊くと、これは真っ赤になって何にも言わず、母親の玉江は、

「何んと言ってもまだ十九ですから、人柄を見抜くことなどは思ひも寄りません」

と謎のような事を言うだけでした。

五

平次は庭に降りて、庭石の配置や、かなり深い植込みの様子や、裏木戸の具合を調べて見ました。

作松が言ったように、裏木戸は内から輪鍵が掛って居りますが、釘はさしていず、その下のあたりはよく踏み堅められて、変った足跡などを付けられそうありません。

引返して一色友衛を捜すと、何時の間にやら稽古場に引込んで、春日藤左衛門が置き忘れたままの『禁制の秘曲』の前に、愛管に息を入れて、一生懸命工夫をして居ります。こう音を立てずに吹いていても、その道の者には、曲の感じが判るのでしょうか。

「それが禁制の賦とやらで？」

平次は静かに近づきました。

「え」

一色友衛の振り返った眼には、芸術的陶醉とでも言うのでしょうか、夢見るようなものがありました。

「それを吹くと人が死ぬほどの祟りがあると言うのでしよう」

「私は、そんな事を本当には出来ません。この曲は、少し変っては居るけれど、『寝取り』には違いないのですよ」

寝取りとはどんなものか、それさえ平次には解りません。

「ところで一色さん、死んだお百合さんは、どんなお嬢さんでした？」

「申分のない人でした。優しく、慈悲深く、お気の毒な——」

「妹のあやめさんは？」

「あの人は綺麗でしょう、あんなお嬢さんは滅多にありませんね」

一色友衛の眼は芸術的な陶醉からさめて、現実の世界のあこがれに活々と輝きます。

平次はそれ以上に追及する題目も無かったのでしよう。一色友衛と別れて、今度はあやめと廊下で立話をしている鳩谷小八郎を見付けて、人の居ないところに誘いました。

「鳩谷さんは御武家の出だそうですね」

「三男ではどうにもならない、——笛でも稽古しなきゃ」
少し捨鉢な調子です。

「死んだお百合さんはどんなお嬢さんでした」

「良い人だった、あんな人は滅多にないな」

「妹のあやめさんは？」

「さア」

小八郎は含蓄の深い笑いを残して、平次の思惑に構わずサッと向うへ行ってしまう。

「親分、下手人の当りはつきましたか」

ガラッ八は心配そうな顔を出しました。平次の動きを、不愉快

な顔で見守っている、佐吉の態度に、少しばかりムシヤクシヤしている様子です。

「解つても縛るわけに行かないよ」

「へエ——」

「余つ程巧たくんだ仕事だ。こんな恐ろしい人間を、俺はまだ見たこともない——」

平次は何となく萎しおれ返つて居ります。

「男ですかい、女ですかい」

「それがね」

「驚いたね」

ガラッ八は恐ろしく酔っぱい顔をして見せるのでした。

「解っているじゃないか、八兄あにい哥」

佐吉は苦り切った顔を持って来ます。

「佐吉兄哥、——俺も解つつた心算だが、どうも腑ふに落ちないことがある。一と晩よく考えて、明日の巳よ刻過ぎに、又ここで逢うことにしようか」

平次は変なことを言い出しました。

「そんな手数のかかる事をしなくたって、下手ほ人の匂いのするのを挙げたら宜いじゃないか」

と佐吉。

「それがいけない」

「作松でなきや、継母の玉江さ、——下女といっしょにお勝手に居たつて言うが、あの下女だつて一と役買っているかも知れねえ」

「まア、待つてくれ、佐吉兄哥。下手人はどうせ逃げっこはねえ、

何事も明日のことだ」

平次は何か考えたことのある様子で、サッサと引揚げましたが、一二町行くと小戻りして、主人の春日藤左衛門を呼出し、門口で何やら念入りな注意を与える様子でした。

それから真っ直ぐに神田へ――。

「八、これから一と晩かかる心算で、一色友衛と鳩谷小八郎の身許を洗ってくれ。親兄弟のことも出来るだけ詮索するんだよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「それから、下っ引を狩出して、あの家の通夜にやってくれ。一人へ一人ずつ見張りをつけるようにするんだ、判ったか」

「へエ――」

「油断をすると恐ろしい事になるぞ」

何が何やら解りませんので、八五郎は面喰らって飛出しました。平次の言い付けたことを、忠実過ぎるほど忠実にやり遂げるのがこの男の取柄です。

六

翌る日、平次と八五郎と佐吉が、竹町の春日家に顔を揃えたのは、巳刻半少し過ぎでした。

平次の警戒を裏切って、無事な一と晩が明けると、春日家の空気もさすがに、いづらか冷静さを取戻した様子です。

「少し解りかけた事があります。面倒でも、もういちど昨日の通りの事をやって下さい」

平次は変なことを言い出しました。

「昨日の通りと言うと？」

驚いたのは春日藤左衛門でした。

「皆んな昨日の昼の通りに、——お勝手にはお内儀と下女、お嬢さんは親御さんの部屋に、鳩谷さんは御自分の部屋、作松は物置、——御主人と一色さんは稽古部屋、そして昨日と同じように、上野の午刻このつが鳴ったら、禁制きんせいの賦ふを吹くのです」

「そんな事が——」

あまりの事に、春日藤左衛門はさすがに尻ごみしました。

「いや、これをやらなきゃ、お嬢さんを殺した下手人は解りませんよ。さア、もう正午このつが近い、銘々の部屋に入って下さい」

平次は仮借かしやくしません。八五郎に手伝わせて押込むようにそれぞれの部署に就つかせると、家の中はしばらく、死の寂寞せきばくが領しました。

シーンとした、真昼の淋しさ。

やがて上野の正午刻このつの鐘が鳴ると、奥の稽古部屋から、不気味な笛の音が、明る過ぎるほど明るい真昼の大气に響いて、地獄よみの音楽のように聞えて来るのです。

やや暫くすると、裏木戸は、外から静かに開きました。輪鍵わかぎがかかって居なかったのでしょうか。と、木戸を押してそっと入って来た怪しの者が一人、跫音あしおとも立てずに部屋の外へ忍び寄ると、戸袋の蔭かげから、スルリと縁側に滑り込みました。

見ると、畳の上を膝で歩いているのです。

部屋の中には、後ろ向になった女が一人。怪しい者の手から、それを目掛けてサッと縄が伸びました。と、女と見たのはクルリと振り返って、投げかけた縄の下をくぐると曲者の身体に素晴らしい体当りをくれました。銭形平次です。



©2017 萩 柚月

「わッ」

逃げ出す曲者。

「御用ッ」

羽織はおった女の単衣ひとえをかなぐり捨てると、平次は曲者の利腕ききうでを取って、縁側にねじ伏せたのです。

「親分」

飛んで来たのはガラッ八と佐吉。

平次は曲者の始末を二人に任せて、静かに庭へ飛降りたとき、奥から、勝手から、藤左衛門と二人の弟子と女達は、一ぺんに飛込んで来ました。

「この通り、皆んなの気のつかないように、裏木戸を閉める隙はある」

平次はその間に裏木戸の輪鍵わかぎをかけて、元の縁側へ帰って来た

のです。

ガラッ八と佐吉が滅茶滅茶めっちゃめっちゃに縛り上げた曲者を見ると、下谷から浅草の界限かいわいを、物貰いをして歩く馬鹿の馬吉という達者な三十男。

「あれ、何をするんだよ。俺は何にも悪いことをしねえよ」

檻樓ぼろだらけの装束しょうぞくをゆすぶりながら、大声にわめき散らすのでした。

「馬吉、——飛んでもねえ野郎だ。何だってこんな所へ入って来たんだ」

平次は静かに訊きました。

「一貫の大仕事だよ、一貫ありやお前何だって食えるじゃないか」

「その錢をくれたのは誰だ」

佐吉は少しあせります。

「知らねえよ、言っちゃならねえことになって居るんだ」

「よしよし、お前は良い男だ。俺が二貫やるから、その錢をくれたのは誰だか言ってくれ」

平次は餌を抛ったのです。

「二貫？ 嘘うそだろう」

「嘘じゃない、ほらこの通り」

平次は一と掴つかみの錢と小粒を交まぜて馬吉の膝小僧の下に並ならべたのです。額は二分以上あったでしょうが、馬吉にとっては、一貫の上は二貫でなければなりません。

「やア、随分あるな。それだけありや、馬だって殺してやるぜ、

——錢をくれた人かい、顔は判らなかつたよ。この暑いのに、頭巾ずきんを冠かぶった侍だったよ」

そう言ううちにも、馬吉の目は、好ましそうに一と掴みの銭の山を眺めるのでした。

「皆さんに聴いて貰いたいことがあります。稽古部屋へ集まって下さい、——馬鹿の馬吉は、そのまま物置へ抛り込んでおけば、銭を眺めて遊んでいますよ」

平次は春日家の人達を、下女のお篠から下男の作松まで、奥の稽古部屋に入れました。

「親分、馬吉を噓けたのは誰でしょう」

春日藤左衛門はさすがに気が気でない様子です。

「今に判りますよ、——これで皆んなかしら、——いや頭数なんか数えるまでもない、——そこで、馬鹿の馬吉を使ってお嬢さんを殺した曲者は誰か、これから考えて見ましょう」

これから考える——という悠長な言葉に、藤左衛門は眉をひそめました。

「曲者は、——びっくりしちやいけませんよ、実は、妹のあやめさんを殺す気だった。馬鹿の馬吉を手なづけ、膝で歩くことや、縄で締めることまで仕込んで、あの日裏木戸から植込みの蔭へ誘い入れて隠した」

「——」

「馬吉には、上野の正午が鳴って、奥で笛の音がしたら、そっとお嬢さんの部屋へ入って、害めるように教えて置いた。笛の音と一緒にやるのは、その時刻には、皆んな銘々の部屋に入って、怖々時の経つのを待っているから、あの部屋のあたりには人目がない上に、自分は何の関係もないことを他の人に見せ付けておくことが出来る。それから、何もかも禁制の賦の祟と思わせることも出

来るかも知れず、それがいけなければ、平常^{ふだん}投げ毘^{わな}の自慢をして
いる作松に罪を被^きせることが出来る」

平次の説明の恐ろしさに、思わず一同は顔を見合えました。

「それは誰だ。親分、言っ下さい。その娘の命を狙^{ねら}ったのは誰
だ」

春日藤左衛門はたまり兼ねて、平次の方ににじり寄りました。
娘の敵が判^さつたら、即座^{そくざ}にも斬^つつてかかる心算^{つもり}でしょう。

「あれ、——あれが下手人ですよ」

平次は耳をすまして、遠く物置の方を指しました。

「御用ッ、御用だッ。野郎ッ」

八五郎の叱咤^{しった}と、刃^{やいば}と十手の相搏^{あいう}つ音が、明るい真昼の空気に、
ジーンと響きます。平次を先頭に皆んな飛んで行きました。物置
の前では、八五郎に組み敷かれた一人の曲者、まだ精いっぱい争
い続けております。

「あッ、友衛^{ともえ}」

藤左衛門も、玉江も、あやめも色を失いました。その曲者とい
うのは、——禁制の秘曲を、あんなにせがんだ、——猫の子のよう
に弱々しい、あの一色友衛の、取乱した凄まじい姿だったのです。
「この野郎が、馬鹿の馬吉を、後から匕首^{あいくち}で刺^さそうとしましたよ」
ガラッ八の威勢のよさ。

「そんな事だろうと思ったよ、恐しく悪知恵^{わるちえ}の廻る野郎だ」
平次はガラッ八に手を貸して、一色友衛を縛り上げます。

「親分、これが曲者？ あの娘を殺したのがこの男でしたか」

藤左衛門はよろよろと崩折^{くずお}れて、鳩谷小八郎に援^{たす}けられました。
「一色家の何もかも、——格式も、芸も、皆んな春日家^{かすが}のお前さん

に奪られたと思ひ込んでいますよ。根性の曲った人間の考えることは、まともな人間には判らない」

不意に縛られた友衛は立上がりました。

「そればかりじゃない、あやめまでこの俺を踏付けやがった——
売女」

「あれエ——」

物凄い呪の叱咤を浴びて、あやめは暴風の前の草花のように大地に崩折れました。

「八、向うへつれて行け」

平次は八五郎に目配せして、必死と狂う一色友衛を遙かの方に遠ざけながら続けました。

「皆んなあの男のひがみだ。が、内弟子も、外弟子も、あんな綺麗な娘を勘定に入れずに、芸事にばかり打込んで来ると言うのも間違いだ。——人間は人間が考えるよりは弱い。早く婿を決めることですね」

平次はそう言い捨てて、八五郎の後を追います。何時もの人を縛った後口の悪さを舐めているのでしよう。

馬鹿の馬吉は、物置の中でいつまでも銭の勘定をしておりました。手におえない夥しい宝に陶醉した顔を挙げて、時々ニヤリニヤリとするのを、手柄をフイにした佐吉は忌々しく睨め付けております。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>